
バーサーカーれいむの憂鬱

夕星 祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサーカーれいむの憂鬱

【Nコード】

N9688Y

【作者名】

夕星 祭

【あらすじ】

チートの能力を手に入れた博麗霊夢が、おのれの願望を成就させるために、行く手を阻む敵たちをばったばったと薙ぎ倒していく痛快アクションストーリーにしたかったです。

始まる前 - 1

知ってる？

博麗神社の巫女のうわさ。

普段はマイペースでのんびりしてる彼女だけど、実はとんでもない力を秘めてるんだって。

うん、そう。

魔理沙のマスタースパークを片手で弾き返してる彼女を見た人もいるらしいよ。

でね。

最近になって彼女、こんなふうに呼ばれるようになったの。

『狂った巫女少女 - バーサクレイム -』

ってね。

私は起きました。

ガバリと毛布を剥ぎ、布団とひっくりくるめてその辺に投げ捨てました。

いそいそと歩いて行って、部屋の戸を開けます。

その途端、ギラギラとした太陽光が私の体を包みました。

今日はひたすらに晴れていました。

見上げた視界に映る空は蒼く澄みわたっていて、普段の1.1倍ほど輝きを増したように見える太陽が、私の眼を焼きかけました。

痛いです。

反射的に顔を下ろしました。

今日はあまり外に出ないようにしたほうが良さそうです。この天気だと最悪焼け死にます。

私は一旦部屋に戻り、冷蔵庫からガリガリ君を取り出してから、もう一度外に向かいました。そして縁側にどさりと倒れこみ、近くに落ちていたうちわを拾って仰ぎながら、包装紙から取り出したアイス舐めました。

少しばかりしたあと、汗に浸った前髪が顔に張り付いていることに気が付きました。邪魔です。でも手を動かすのも面倒な気分だったので、放置することにしました。

数分間、ぼーっと倒れていた私は、いつの間にかアイスではなくアイスの棒をなめていたことに気が付きました。そうです。私はもう、アイスを食べ尽くしてしまっていたのです。

なんということでしょう。これが最期の一個でした。もう冷蔵庫には何も入っていません。かといって死地を掻い潜ってまでして買に出るのも億劫です。

「あー」

棒つきれを庭に投げ捨てて、私はそのまままどろみへと身を投げることにしました。体が温まってきて眠いです。

目を閉じます。うっかり先程の髪の毛が眼に挟まりました。動くのが面倒くさいので、首を左右にシャウトさせて振り払いました。これで安心して眠りに入れます。

私はもう一度目を閉じて、そして今度こそ眠りに入りました。

数分後。

「……………」

数時間後。

「……………うあ」

数日後。

「……………」

数週間後。

「……………」

数カ月後。

「はっ！」

目が冷めました。

ここはどこでしょう。私は誰でしょう。

ここは博麗霊夢です。私は博麗神社です。

はい。

辺りを見回します。

頭上に広がっていた空は曇っていました。それはもう『曇り』というもののアイデアとして何らかの団体に認定されそうなほどに完全な曇りでした。

太陽は見えません。見えないのに世界を照らし出しているその存在に、哲学的な何かを感じます。

私は部屋に戻り、ガリガリ君でも食べようと冷蔵庫を開けました。しかし、そこには何もありませんでした。

「……………あ」

そうです。なんと私はアイスを全て食べてしまっていたのです。しかし前回と違い、現在の天気は居心地至極快適であろうおおよそ完全に超平均的な曇りです。これならスーパーからアイスをおよそらうのも朝飯前でしょう。ちなみに朝飯はアイスにします。

朝飯アイスです。

その言葉に特に意味があるわけではありません。まさにエル・プ

サイ・コングルウです。

はい。

よいさ。

ほいさ。

というわけで、私はアイスを買いいに出ることにしました。

そういえば今更ですが、自らの肢体がまさに下着状態であったことに気が付きました。眠りに落ちたときは確かに服を来ていたはずなのに、なにかがおかしいです。

刹那。

いや涅槃。

私の顔の右側の輪郭上を滑るようなスレスレの近さで、『何か』が横切って行きました。そして、その『何か』はそのまま目の前の壁へと刺さります。なんででしょう。物騒です。

壁に近づいて、その『何か』を引きぬきました。それはどうやら、怪盗がよくやる吹き矢状のメッセージであったようです。そう、紙のようなものが『何か』にはくるまっています。

私はそれを筆りとして出来るだけ雑に広げます。

『草々。果たし状。れいむの服は頂いた。返して欲しければ魔理沙城（新築）まで来るがいい。written by きりさままりさ』

そう書かれています。どうやら『博麗霊夢私服失踪事件』の犯人は魔理沙だったようです。しかしこの魔法使い、カッコよく英語を使いながらにして自分の名前のひらがなを間違えています。馬鹿でしょうか。Yes, she is fool.

しかも魔理沙城ってどこでしょう。そんなの知りません。たけし城しか知りません。（新築）と書いてあることから、どうやら私が昼寝をしていた間に竣工していたようです。相変わらず芸が早い。早さしかない馬鹿だ。

とりあえず服を取り戻さないことには、落ち落ちアイスを買いいに行くこともできません。どうやらまず始めに魔理沙を倒すことから

初めなければならぬ模様です。

「よし」

私はクローゼットに行つていつもの巫女服型礼装を着こむと、そこに立て掛けていた刀を手に取りました。

この刀は『想像具現型未来礼装究極タイプver2.31（通称・紙裂刀・カミキリムシ・）』という名称で呼ばれている私の宝具です。この刀の存在は公になっていません。この刀を見たものは、全てその場で断末魔の悲鳴を上げたからです。

そう、私は本気なのです。今回こそは、かの邪智暴虐の魔理沙を仕留めてみせるつもりでした。

私は紙裂刀を小型化させてポケットに滑りこませました。
いよいよ出陣です。

私は勢い良く戸を開け放ちました。戸が外れました。

外は雨が降っていました。雨のイデアとしてどこかの団体に認定されそうなほどに、猛烈な雨が降っていました。

寒いです。外に出たくないです。

そう思ったので、私は部屋に戻つて、戸を丁重にはめ直して、布団を拾つてきて敷いて寝ることにしました。

今日は中止して、また今度、魔理沙狩りに出ることにします。
そして。

目をつぶつた私は、そのまま深い眠りへと入って行きました。

始まる

『ピンポーンピンポーン。こちらは、幻想郷市役所です。臨時ニュースをお伝えします』

私が縁側でお茶をすすっていると、どこからかアナウンスの音が聞こえてきました。

『今朝未明。紅魔館で原因不明の爆発事故がありました。幸い、死傷者は出なかったものの、紅魔館に溜まっていた高純度の魔力が辺りに拡散してしまったため、今後、幻想郷で異常事態が起こる可能性があります。お気をつけ下さい。臨時ニュースをお伝えしました』
ピンポーンピンポーン、という音が再び響き渡り、そこでアナウンスは終了しました。

異常事態 ですか。大事にならないといいのですが。

「あ」

そこで私は用事を思い出しました。そういえば、アイスを買いに出来なければならなかったのです。備蓄は既に尽きてしまっていたため、食べたたくて食べたたくてしょうがありません。

私は一旦神社内に戻り、いつもの巫女服を着こむと、鳥居をくぐって外へと出ました。

空を見上げると、雲ひとつない快晴でした。絶好のお出かけ日和になりそうです。

私はいつものように、空を飛ばすと地面を蹴りました。しかし。

おかしいのです。

私はもう一度、強く地面を蹴りました。

なのに。

なぜなのでしょう。

どうしてなのでしょう。

どうして 空をとぶことができないのでしょうか。

その後、何度も何度も地面を蹴り込んだのですが、結局、私は飛ぶことができませんでした。

鳥居をくぐり直し、一度神社に戻ります。

縁側に座って、思案しました。一体何が起きているのでしょうか。

頭の中で色々ところねくり回していると、先ほどのアナウンスに行き当たりました。

幻想郷で異常事態が起こる可能性があります

これがその異常事態なのでしょうか。

そうだとしたら、どうすれば解決できるのでしょうか。

異常事態とやらの原因が、魔力の暴走なのだとしたら、魔力制御術式などを使えばよさそうなものですが……しかし、紅魔館は幻想郷の中でもトップレベルの《魔力だまり》です。もしもあそこの魔力が全て拡散していたのだとしたら、一個人の半可な術で御することとは到底不可能でしょう。

「うーん……」

悩んでも一向に解決しそうになかったので、私は、とりあえず誰かに相談することにしました。

私は立ち上がり、再び鳥居の方に歩みを進めようとした

そのときでした。

強烈な殺気を感じた私が、急いで後方に飛び退くと、つい今まで立っていた場所に、数千は超えようというほどの無数のナイフが滝のように突き刺さりました。

私はそのあまりの勢いに、距離を空けていたものの、思わず顔を隠してしまいます。

数秒ほどが経過し、私が目を開けると、博麗神社の境内には、ま

るで小型の隕石が衝突したかのような、《巨大な穴》が空いていました。神社がすっぽり収まりそうなほどの規模です。

「これは……」

私は、この攻撃方法に一つの心当たりがありました。

ナイフによって場を制す。紅魔館の敏腕メイド。

『十六夜 咲夜』。

彼女に間違いなさそうです。

私は辺りに声を響かせました。

「紅魔館のメイドでしょ！ いるのはわかってる。隠れてないで出てきなさい！」

そのとき、神社の左手にあった林が、かさこそと揺れました。どうやらあそこに潜んでいるようです。

「私と戦うなら正々堂々と挑んでくることね、闇討ちなんて許さないわよ」

鬱蒼としている林の方に向かって、そう叫びます。

一呼吸ほど時が過ぎたあと、そこから一つの影が姿を見せました。かのメイドでしょう。

「やっと出てくる気になったのね。いいわ、戦ってあげる」

影はそのまま、巨大な窪みの中心まで歩み出てきました。

「え……？」

その姿を見た私は、狐につままれたような感覚に陥りました。なぜなら。

そこに立っていた人影は。

決して、十六夜咲夜などではなく。

「一つ勘違いを正しておきたいのだけれど」

長く伸びた黄金の髪。特徴的なリボンを頭に乗せた

「私の名前は、八雲紫よ」

スキマ妖怪だったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9688y/>

バーサーカーれいむの憂鬱

2011年12月11日22時59分発行